

纏めた筋金入りの旅バカ人生 自分の足で歩いて分かった世界



(くりいわ・ひでこ)1943年、静岡県三島市生まれ。東京農業大学造園学科を卒業後、養蜂研究所の職員や焼き芋屋、物干し竿の行商などを経験。1974年に第1回、89年に第2回の世界一周の旅立つ。91年に道北の下川町に移住し、4年後にレストラン「モレーナ」を開業。コロナ禍が始まった2020年から今年夏にかけて、『昭和放浪記』『平成放浪記』『日本放浪記』の3部作を自費出版。旅行画家でもある

■下川町・栗岩英彦さんの「旅バカ」人生

も交え、記念の宴は遅くまで続いた。「世界中をこの足で歩いてみたい」が栗岩少年の夢だった。船員になって外国に行こうとしたが、大学受験を前に結核を患って断念。長い療養生活を終え、大学卒業後は名古屋市内の養蜂研究所で働くが、長年の夢は諦めきれなかった。

1974年、栗岩さんは妻の照子さんと一緒にユーラシア大陸に向かう。まだ世界一周をめざす若者は少ない中で、欧州からシルクロードを経てインドでの生活…と波乱の旅は1年4カ月におよぶ。この時の旅日記をまとめたのが第1作『昭和放浪記』(20年11月出版)である。

帰国後も栗岩さんの放浪の旅は続く。十勝のトムラウシに通う中で2人目の妻・文子さん(故人)と出会い、天安門事件で揺れる中国を訪れた。混乱を逃れ、北インドで一冬をすごした後、自転車でスペインやポルトガルを回る(89〜90年)。この時の話を書いたのが第2作『平成放浪記』(21年1月出版)だ。

第3作の『日本放浪記』(22年8月同)は、軽パンを駆って半年間におよんだ日本一周の旅(78年)を縦糸に、その前後の旅先での出来事を横糸に



3冊の『放浪記』には、旅の途中に描いた水彩画や写真をふんだんに盛り込んだ

まとめた一冊。昭和の香りがあふれる旅行記に仕上がった。

コロナ禍が自費出版を後押しし、刊行に向け「下川チーム」も発足

栗岩さんは30〜40代にかけて、肉体労働で稼いだ資金で国内外を放浪する「旅バカ人生」を送ってきた。90年代初め、わたしが暮らす道北の下川町に移り住み、古い農家を改造して「モレーナ」を開業。北インドで覚えたカレー料理などを提供する一

人生の締めくくり自身に自身の軌跡を一冊の本にまとめたいと願う人は多いが、それを実現させる人は少ない。道北の下川町でカレー料理の店を営む栗岩英彦さんは、1970年代から長らく世界各地を歩き、軽パンやバイクでの日本一周も成し遂げた筋金入りの「旅バカ」である。旅の流儀は、訪れた国の数を自慢するものではなく、自分の耳で現地語を覚えて人々と話し、子供たちと遊び、村の食堂で現地の食べものを口にする。そんな人物がコロナ禍が始まった一昨年から最近にかけて3冊の『放浪記』を相次いで自費出版し、その取り組みに共感した人たちがチームをつくって栗岩さんを支えた。編集のこぼれ話も交えながら『放浪記』に込めた著者の思いを紹介する。

(ルポライター・滝川康治)

この足で世界を旅してみたい少年の頃の夢が3部作に結実

10月14日夜、下川町内のレストラン「モレーナ」は店主の栗岩英彦さん(1943年、静岡県生まれ)が執筆した『放浪記』3部作の出版を祝う人のにぎわった。幼児から和服姿の年

配女性まで50人余り、若者も目立つ。著書の中から栗岩さんが和歌山の海辺の町で食堂を営む夫婦とのやり取りを再現した『タコ焼き定食』と人情、ポルトガルの辺境での一夜を記した『ジプシーの人々との出逢い』を朗読し、参加者が静かに聴きいる。ジャズコンサートやギター演奏



出版記念の祝賀会で著書の一部を朗読する栗岩英彦さん(10月14日、下川町の「モレーナ」で)

方、店が暇な冬になると外国を旅する―脳梗塞を患う12年前まで、そんな生き方を続けてきた。「自分の耳で現地語を覚えて人々と話し、子供達と遊び、町や村の食堂で現地の食べものを口にする。また、常に持ち歩いてきたギターを弾き、無心に歌った。そんな旅を重ねるうちに、『人間は人間である』という確信を持つことができた。悪い人間はわずかであり、言葉も道もわからずに困っていた私に対し、人々は親切で優しくかった」(『昭和放浪記』あとがき)

自費出版のきっかけは数年前にさかのぼる。町内でフリーの英語教師をやっている富永幸子さんに旅日記を貸した。後日、「俺が死んだらゴミ処理場で燃やされる。それでいいんだよ」と話すと、「もったいない。活字にして残したらどうか」と薦められた。しかし、当時は自分の日記に価値があるとは思わなかった。

2020年の冬、新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言が発令される

や、店の客足が途絶えた。「今、自分がやれることは…」と考え、出版版に心が動く。栗岩さんから相談を受けたわたしは、過去に近隣の郷土研究グループが刊行した単行本を編集したり、自著を上梓した経験もあり、編集を引き受けることにした。

夏までに下川町ゆかりの有志数人でつくる出版チームが発足。スムーズに作業が進み、着手からわずか半年で『昭和放浪記』が誕生した。本が届いた日に著者が見せた、感極まっ

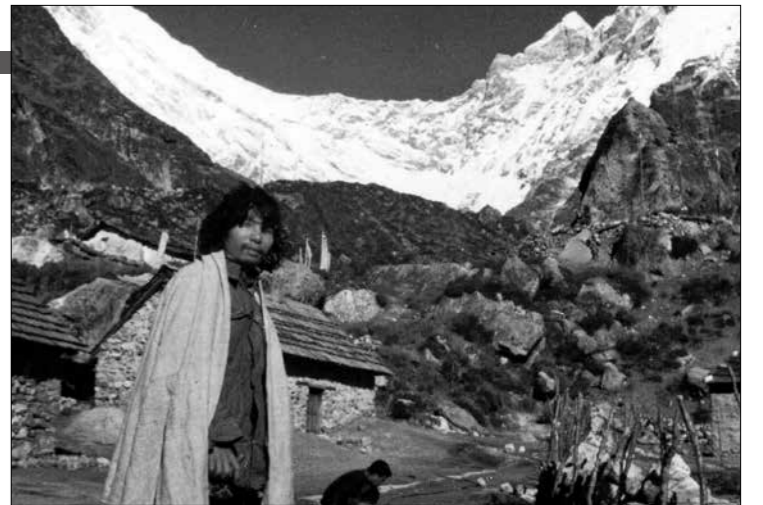


相棒の照子さんと軽バン「スバル・サンバー」で日本一周の旅
(1978年秋、宮崎県えびの高原で)

くらいの日本人残留者と出会う。片言の現地語と筆談でのやり取りの下りは感動的だ。なぜ彼らが孤児として残留せざるを得なかったのか——戦後の裏面史を掘り下げると、奥の深い記録になったように思う。

昭和の香りあふれる日本の旅 世代を超え共感の声が届いて…

『日本放浪記』は、『昭和放浪記』の続編として、今から40年余り前にスバル・サンバーで全国各地を回った記録と、その前後に体験した出来事を



標高5,000m、ネパールの山岳地帯を旅する(1974年12月)

たような表情が印象に残る。
74年2月に横浜港を発ち、ナホトカからシベリア鉄道でモスクワに向かった栗岩さんと、旅の相棒だった照子さん。ポーランドとの国境付近では列車内で兵士の取り調べを受けるなど、東西冷戦下のソ連の非情な一断面が描かれる。やがて列車はオーストリアの首都・ウィーンに到着し、2人の若者の旅が続く。
イタリア・シシリ島で知り合った人々との交流やローマ見学、欧州

人の記録から窺える日本人観…。スペインを列車で旅し、ギターでフラメンコの曲を弾くと乗客からやんやの喝采を浴び、マドリッドやロンドンでは下宿生活も体験した。
欧州からアフリカに渡る計画だったが、情報を集めると危険が伴うと直感した。一足先に相棒が帰国し、自身はシルクロードを経由してインドに向かう旅程に変更。ガイドブックやスマホもない、情報は口コミが頼りという時代だ。冒険の旅が続き、インドのガンジス川河畔の村で暮らすうちに体調を崩し、世界一周の夢を諦めて帰国する……。

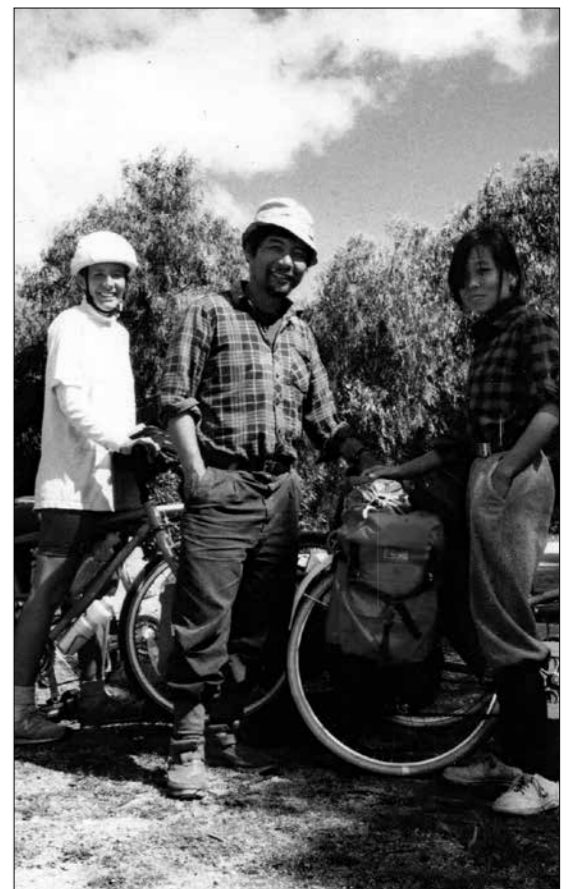
「日本を出発する前は、人種差別の問題には気づいていなかった。でも、ロンドンを旅した時に肌が黄色いだけで2回ほど差別を受け、憤りを覚えた。旅を重ねるうちに白人が黒人を、英国人がインド人を差別する場面にも出会った。根も葉もないのに相手を貶める構図は良くないと思う。『昭和放浪記』では、そのあたりも伝えようとしたんだ(栗岩さん)」。この一冊は、往時を生きた人々には過去を振り返る読み物であり、若い世代には勇気を持って旅に出ることを促す書といえるだろう。

まとめた一冊である。栗岩さんは読者に対し、「コロナ禍で旅に出にくい時代だからこそ、日本一周の疑似体験を楽しんでほしい」「70年代の雰囲気や風俗、人々の暮らしぶりを伝えたい」と考えた。

昨年春、第3作の編集を打診されたわたしは、どうも気が進まなかった。ベースになる『江別文学』に掲載された旅行記は駆け足すぎて面白みに欠ける。さらに、肝心の旅日記の多くが失われ、ディテールを再現しにくい——これでは著者の自己満足に終わり、多くの読者を獲得できないと感じ、その旨を直言した。

「残された写真と私たちの記憶を手がかりにした執筆作業は大いに苦労した(著者あとがき)。こうして、半年間にわたり大幅な加筆と修正をくり返し、なんとか単行本らしくなり、出版にこぎつけた。栗岩さんはネットを使わず、FAXもない。拙宅と「モレーナ」は6キロほどの距離で、原稿のやり取りや校正などで行き来し、「メールを使えばもっと効率的にできるのに…」と何度思ったことか。

前2冊は外国での話だが、『日本放浪記』の舞台は国内である。登場す



2人目の妻・文子さん(故人・右端)とスペインからポルトガルを自転車旅行(1990年春)

天安門事件で揺れる中国を訪れ 欧州を自転車で巡った平成の旅

並行して『平成放浪記』の編集作業を進め、前作の3カ月後に納本。旅日記や多数の写真、水彩画などが残っていたことに加え、チームワークが発揮され、相次いで出版できた。80年代の栗岩さんは、物干し竿や焼き芋を売って生計を立てる一方、独学で旅行画家の道を模索。オートバイでの日本一周や登山、沖縄への旅、カヌーなどのアウトドアと、心の赴くまま「旅バカ」生活を続けた。やがてトムラウシに落ち着き、89年には再び世界一周へと旅立つ。天



2021年暮れ、編集担当の筆者と『日本放浪記』の原稿をチェック
(撮影：尾瀧鉦一さん)

地域の歴史や文化、人々の暮らし

ぶりに明るい人は多く、事実認識などがあれば著者や編集者の信用失墜につながる。入念に校閲したつもりだが、果たしてどうだろうか。

「人々の生活はワンパターンじゃなく、その土地に根ざした風習や文化、暮らしがある。テレビやスマホの情報だけでは、世界は多様な人々で成り立っていることは分からない。旅に出て自分の足で歩き、目で見ると、この3部作を書いたんだ」

安門事件で揺れる中国などを旅し、社会主義国なのに貧富の差が歴然とある列車内での交流や、荒野に立つシルクロードの宿、チベット青年との出会い…と、ありきたりの観光旅行では得られない体験を重ねた。
そして、ヒマラヤの山岳地帯を越えてパキスタンに逃れ、北インドの地で一冬をすごす。さらに欧州に飛んで自転車旅行を続ける…。そんな中で、ふと世界一周にこだわることを疑問に感じて1990年秋、旅をやめて帰国し、下川に移住するまでを記した物語である。

と栗岩さんは力を込める。

3冊とも3百ページを超える大作で、千部ずつ作成した。一部を書店に配本した時期もあるが、『昭和』『平成』は残りが2百部前後になった。自費出版としては上出来だろう。出版費用は友人・知人らの寄付や著者の資金、本の売り上げで賄い、旅の相棒だった加藤照子さん(福島県在住)から物心両面の支援もあった。
読者からの感想では、「読みやすい」「いろんなエピソードが盛り込まれ、面白い」「自分が旅しているような気がする」「旅に出たくなった」といった声が多いと聞く。これは、20代の若者から80代の年配者まで、世代を超えた感想のようだ。

栗岩さんは、この12月で79歳になる。出版に対する意欲は衰えず、旅行画集の刊行や、未公開の世界旅行記の電子書籍化などを模索中だ。店を営むわたわら、旅バカ人生を締めくくる日々が続く。

※各『放浪記』は1900円(税込み)。電話かHP経由で注文すると郵送してくれる(送料は別途)。

■下川町北町309 モレーナ
☎01655・44110
HP: <https://cafemorena.info/>